様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３５３１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０１２０４

研究課題名（和文）シラク政権下の博物館構想ールーヴルからホロコースト記念館まで

研究課題名（英文）The Museum Initiative under Jacques Chirac's Administration- from Louvre Museum to The Shoah Memorial

研究代表者
松岡　智子（MATSUOKA, Tomoko）

倉敷芸術科学大学・芸術学部・教授

研究者番号：９０２７９０２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、ドゴールからはじまりミッテラン大統領の時代に至るまでの博物館政策とは明確に一線を画している、ジャック・シラク政権下の「多文化共存」重視の博物館構想について、今ではよく知られている代表的なパリのケ・ブランリー美術館と共に、我が国では本格的に紹介されることのなかったパリの国立移民史博物館、ユダヤ芸術歴史博物館、ホロコースト記念館に注目した。それらのなかでも特にユダヤ芸術歴史博物館とホロコースト記念館に着目し、何故シラクがこれらの博物館の設立に積極的に関わりをもったのかについての考察を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究期間の成果の１つとして、筆者が監訳者となり2017年に翻訳・出版したフランス前大統領ジャック・シラクの演説集『ジャック・シラク　フランスの正義、そして、ホロコーストの記憶のために』(明石書店)が挙げられる。これは現在、「フランス被追放ユダヤ人子息子女協会」の会長を務めるセルジュ・クラルスフェルト氏が編纂したフランスのホロコーストに関する13篇のシラクの演説とメッセージが含まれている。その中にはホロコースト記念館開館式やアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所での演説もあり、それらの内容は我が国でもこれまでほとんど紹介されておらず、フランス現代史においても貴重な一次資料である。

研究成果の概要（英文）：In this study, I focused on the 《multi-culturalism》oriented museum concept under the French President Jacques Chirac administration, which clearly distinguishes the museum policy from French President Charles de Gaulle to the era of French President François Mitterand. Among them, along with the currently well-known the representative museum in Paris Musée du quai Branly, I focused on the Musée de l'histoire de I'immigration in Paris, the Musée d'Art et d'Histoire du Judaisme, the Memorial de la Shoah, which were not introduced in Japan in earnest. Especially, I focused on the Musée d'Art et d'Histoire du Judaisme and the Memorial de la Shoah, and tried to consider why President Jacques Chirac was actively involved in the establishment of these museums.

研究分野：博物館学、美術史

キーワード：ジャック・シラク　セルジュ・クラルスフェルト　ホロコースト記念館　ユダヤ芸術歴史博物館　ヴェル・ディヴ

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ドゴールからはじまりミッテラン大統領の時代に至るまでの博物館政策とは明確に一線を画しているフランスのジャック・シラク政権下の「多文化」重視の博物館構想について、これまではシラクの強力なイニシアティヴによって設立されたことで知られる、《非西洋》－アフリカ、アジア、オセアニア、アメリカ－の民族資料を展示するルーヴル美術館内の新ギャラリー「パヴィヨン・ド・セッション」（2000 年）及びケ・ブランリー美術館(2006 年)が主に紹介されるだけであり、シラク政権下の複数の美術館・博物館を総合的な視点から分析した学術論文や学術書は見られなかった。

筆者は 1987 年から 1989 年にかけてパリのルーヴル学院で博物館学を学んだのち、日仏の美術館に関する研究を進めてきた。その成果として、パリ装飾美術館館長を務めたダニエル・ジロディ著・高階秀爾監修・松岡智子(筆者)訳による訳書『美術館とは何か』（鹿島出版会）を出版、その後、日本で最初の本格的な西洋美術館である大原美術館の基礎的コレクションの収集を行った洋画家であり文化交流者でもあった児島虎次郎の研究によって、2004 年に東京大学より文学博士号を取得し、同年、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受け、松岡智子著『児島虎次郎研究』（中央公論美術出版）を出版した。その後も、ミミ・ザイガー著・松岡智子訳『ニュー・ミュージアム－現代美術・博物館の旅』（鹿島出版会、2007 年）を出版、さらに、太田泰人・水沢勉、渡辺真理、松岡智子による共編著書『美術館は生まれ変わる－21 世紀の現代美術館』（鹿島出版会、2008 年）を出版した。本書は欧米、アジアにおいて進行している新たな美術館をめぐる動向を調査、研究したものであり、筆者はルーヴル美術館とケ・ブランリー美術館についての歴史や時代背景を中心に論じた。

その後、2009 年より 2011 年の 3 年間、科学研究費補助金（基盤研究 C）の交付を受け、「シラク政権下における美術館構想－ケ・ブランリー、ルーヴルを事例に」をテーマとする研究を行った。本研究で筆者はシラク政権下における美術館構想の分析を進めた結果、国内外でも本格的な研究対象になっていないパリの国立移民史博物館もまた、シラクの強いイニシアティヴによって作られたものであることが明らかとなった。以上の課題についての、文献資料収集と現地調査に基づく研究成果としては以下の論文が挙げられる。

・松岡智子「ジャック・シラクの美術館構想に関する一考察」（『倉敷芸術科学大学紀要』第 16 号、2011 年）

・松岡智子「シラク政権下におけるもう１つの美術館構想－国立移民史博物館をめぐって－」（『倉敷芸術科学大学紀要』第 17 号、2012 年）

そのため、シラクの美術館構想の全体像を再構築しなければならないという大きな課題が残されたのである。

続く 2013 年より 2015 年の 3 年間、科学研究費補助金(基礎研究 C)の交付を受け、「シラク政権下の美術館構想－文化学の視点から」をテーマとする研究を行った。その結果、代表的なルーヴル美術館内の新ギャラリー「パヴィヨン・ド・セッション」やケ・ブランリー美術館以外にも、彼がパリ市長時代から積極的に設立を支援していたユダヤ芸術歴史博物館（1998 年）やホロコースト記念館（2005 年）、そして、国立移民史博物館（2007 年）も調査対象にすべきであることが、筆者の調査・研究により明らかとなった。また、パリのビッグ・ミュージアムの「分館」という、これまでには見られなかった新たな形態の美術館であるルーヴル・ランス、ルーヴル・アブダビ、そして、ポンピドゥー・センター・メッスについても視野に入れなければならないことが明らかとなったのである。そのため、これらの美術館・博物館の調査のため、以下の関係者との面談を行い、新たな情報を得ることができた。

(1) ホロコースト記念館国際関係担当局長のブルーノ・ボワイエ氏
(2) フランス被追放ユダヤ人子息子女協会会長のセルジュ・クラルスフェルト氏
(3) ユダヤ芸術歴史博物館館長のポール・サルモナ氏
(4) 国立移民史博物館研究課長のマリアンヌ・アマール氏
(5) オルレアンのヴェル・ディヴ子供博物館会長のエレーヌ・ムシャール・ザイ氏および館長のナタリー・グルノン氏

こうした、文献資料収集と現地調査に基づく研究成果としては以下の論文が挙げられる。

・松岡智子「ユダヤ芸術歴史博物館とパリ・マレ地区」（『倉敷芸術科学大学紀要』第 18 号、2013 年）

・松岡智子「《越境》する美術館－ポンピドゥーセンター・メッスとルーヴル・ランス」(『倉敷芸術科学大学紀要』第 19 号、2014 年)

・松岡智子「記憶の場所－ショア記念館(パリ)を中心として」(『倉敷芸術科学大学紀要』第 20 号、2015 年)

２．研究の目的

本研究課題は「シラク政権下の博物館構想－ルーヴルからホロコースト記念館まで」とあるように、これまでの研究をふまえ、特に今まで指摘されることのなかったユダヤ芸術歴史博物館及びホロコースト記念館に強い光をあてることにより、フランス社会における「ユダヤ人」と向き合うジャック・シラク政権下における博物館構想についての考察を行うことを目的としている。

というのも、シラクは市長時代にすでにパリ・マレ地区にある 17 世紀半ばに完成した元貴族の邸宅サン＝テニャン館の修復と復元作業を積極的に支援しており、1998 年、ユダヤ芸術歴史博物館としてようやくオープンし、その開館式には大統領となったシラクを筆頭に、カトリーヌ・トロットマン文化・コミュニケーション大臣、ジャック・ティベリ・パリ市長、クロード・ジェラール・マルクス会長が参加したことが同博物館内に記載されており、この博物館が国家的なプロジェクトとして設立されたことを明示している。また、同じくマレ地区に 2005 年に開館したホロコースト記念館についても、その礼拝堂の入り口に提示した解説パネルに書かれた「1995 年 7 月 16 日、50 年間の沈黙と忘却ののち、ジャック・シラクが演説のなかで、第二次世界大戦中、フランスに在住していたユダヤ人に対して、ドイツ占領軍が行った犯罪に、ヴィシー政権が加担したことを正式に認めた」との記述を、現地調査によって発見することができた。また、記念館の開館式の際、シラクは演説を行い、その 2 日後も、ポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所開放 60 周年を記念し、同収容所に隣接するビルケナウ跡地で行われた式典に参加するとともに演説を行っている。

これらのシラクの演説も含む 13 篇の演説とメッセージ集は一般の書店にはないが、先に挙げたパリのホロコースト記念館の書店で販売されていたのを調査のなかで発見しフランス現代史における貴重な資料と考えたため、それを編集し出版したルーマニア系ユダヤ人で、歴史家弁護士のセルジュ・クラルスフェルト氏に許可を得て、邦訳出版することも本研究の目的の１つとなった。

３．研究の方法

東京を中心とした国内の図書館や大学、その他の研究機関で文献資料収集(特に国立国会図書館で『フィガロ』や『ル・モンド』紙を中心とした新聞・雑誌記事を検索)し、関連図書を購入する。また、国内の関係者への聞き取り調査を行う。

さらに関連するフランスの美術館･博物館･記念館や図書館(主にミッテラン国立国会図書館)で、日本では入手しにくい文献資料を収集し、また、該当する美術館や博物館を視察し収蔵品やそれらの展示方法、常設・企画展示についての調査を行い、館内の資料室で文献資料を収集し、専門家や関係者から聞き取り調査を試みる。

４．研究の成果

本研究の主な成果は次の３つが挙げられる。

(1)　パリのケ・ブランリー美術館の新たな動向についての情報収集

本研究を開始してまもなくケ･ブランリー美術館の名が開館 10 年目にあたる 2016 年に、ケ・ブランリー、ジャック・シラク美術館と改名され、6－10 月にかけて、同美術館で「ジャック・シラク、文明の対話」展が開催され、筆者はこの展覧会の調査を行った。

フランスにおいて、国家による文化政策が本格化するのは、ドゴールにより 1959 年、文化大臣に任命されたアンドレ・マルローからである。マルローは「文化の民主化」を目指し、フランス国民が平等に享受できるようにし、全国に文化会館(通称「文化の家」)の建設を推進した。また、1950 年代、作家でもあった彼は『芸術の心裡』や『空想美術館』などの芸術に関する著作を発表し、日本文化にも深く親しみ、1974 年には日本を訪れている。続いてジョルジュ・ポンピドゥーが政権を握ると、「あらゆる人々のための芸術と文化」を目指し、様々な形の現代文化や創作活動をパリの一箇所に集めようとしてジョルジュ・ポンピドゥー国立芸術センターを 1969 年に計画し、1977 年に開館した。小学校教員の家に生まれ、高校教師も務めたこともあるポンピドゥーは豊かな教養をもち、現代美術の収集家でもあり、また、『フランス名詩選』の著者でもあった。

さらに 1974 年、シラクを首相に任命した大統領ヴァレリー・ジスカールデスタンは、名門の出身で ENA を卒業した秀才であり、18 世紀の家具・調度や歴史に造詣が深く、オルセー美術館を設立する計画をたてるが、財政難が原因で実現することはできなかった。

その後、社会主義政権を確立したフランソワ・ミッテラン大統領も歴史に造詣が深く、文化大臣にジャック・ラングを起用しルーヴル美術館大改造をはじめ、パリのアルシュ(凱旋門)、オルセー美術館、新オペラ座などの文化的建造物、さらには国立ミッテラン図書館、アラブ世界研究所をも設立するなど、国家予算 1%近くもの文化予算を用い大規模な文化政策を行っている。

このように第 5 共和制時代になると、歴代の大統領は積極的に文化政策を行い、ドゴール以降、追求し続けた「フランスの栄光」の象徴として、国家的記念碑を建設してきた。2016 年のケ・ブランリー、ジャック・シラク美術館の改名はまさしく、ケ・ブランリーこそがシラク政権下の「文明の対話」を推進する文化政策の国家的記念碑に位置づけられることを示している。

しかし、2018 年になると EU 内で博物館をめぐる新たな事態が起こった。英国、オランダ、スウェーデンなどの美術館は、所属するアフリカの美術品を、ベナンやナイジェリアの美術館

に貸与することを決めた。そして、2017年5月に新たに大統領に就任したエマニュエル・マクロンもまた、旧植民地の西アフリカ・ベナンからフランスに持ち出された美術品を返還する方針を決め、他の旧植民地でも返還を求める動きが広がっている。その一方では開館当初から館長を務めるステファン・マルタンは返還に理解を示しつつも、「贈り物としてフランスに渡った美術品も多い」と主張し、「原産国」の美術館に貸し出すなどの方法で、現地の人々が触れられるようにすることを提唱している。

以上のことから、ケ・ブランリー美術館の今後の動向、すなわち、美術館返還問題と博物館について、また、同美術館がこれから直面するであろう、《西洋》と《非西洋》の文化の壁を越えてゆく新たな試みについての考察を行うことが、今後の課題として提示された。

(2) ジャック・シラクの演説・メッセージ集の邦訳出版

2005年のパリのホロコースト記念館開館に向けての中心的な役割を果たしたセルジュ・クラルスフェルト氏が編纂し、1995年の歴史的な演説が含まれた1987年から2007年にかけてのジャック・シラクの演説・メッセージ集の翻訳作業は、筆者と京都ノートルダム女子大学名誉教授の野田四郎氏が担当し、現在、京都橘大学教授の渡辺和行氏にご指導をいただき、筆者が各演説及びメッセージの解題、あとがき執筆し、同氏には序論執筆も依頼した。また、クラルスフェルト氏には序文をお願いした。原著の表紙には「ドイツ占領軍へのヴィシー政権の協力により、犠牲となったフランスのユダヤ人に敬意を表して　『在仏ユダヤ系団体代表協議会』(CRIF)、フランスの『諸国民の中の正義の人』に敬意を表して　そして、ショアの記憶のために」と記されている。訳書は『ジャック・シラク　フランスの正義、そして、ホロコーストの記憶のために』として明石書店により2017年に刊行された。

セルジュ・クラルスフェルトは1935年、ルーマニア系ユダヤ人の実業家の父とロシア系ユダヤ人の母のもと、ルーマニアで生まれ、フランス・パリで育った。しかし、ヴィシー政権下、ナチスの追跡から逃れるため、一家はフランス中南部の自由地域を転々とし1943年、父は、青年だったミッテランが所属するレジスタンス組織に加わったこともあった。しかし、親衛隊大尉アロイス・ブルンナーの指揮のもと、同年９月に行われた一斉検挙により、ニースでゲシュタポの家宅捜索に遭遇してしまう。用心のため家の戸棚の背後に用意していた密室に家族を匿い、父のみが検挙され、強制移送されたアウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所で翌年、死去し、残された家族は終戦まで生き延びた。戦後、パリ大学で歴史学を学ぶ一方、パリ政治学院を卒業、1963年、フランス語を学びにベルリンから来たドイツ人ベアテと出会い、一男一女をもうけた。しかし、ヴィシー政府が積極的にショアに加担した事実は、フランスでは1970年代まで隠微されていた。そして、反ユダヤ主義も進行していたために、この現状を打開すべく妻ベアテとともに弁護士、歴史家、活動家として闘いを開始した。また、同じく弁護士となった長男アルノも加わり、今日に至るまで四半世紀以上もの間、一家で忍耐強く活動を続けており、2014年、夫妻はレジオンドヌール勲章を授与されている。

本書は、我が国ではあまり知られていない、フランスのホロコーストの記憶に向き合うジャック・シラクについて理解する手がかりとなる重要な基本文献であると考えられる。

(3) セルジュ・ベアテ・クラルスフェルトの回想録の邦訳出版

セルジュ・クラルスフェルトは、長い間、フランスが正面から向き合うことのなかった、ショアの記憶の忘却と闘い続ける歴史家であり、ヴィシー政権下のフランスのユダヤ人についての著作も多数ある。なかでもフランスからアウシュヴィッツをはじめとする絶滅収容所に移送された7万6000人近くのユダヤ人の氏名、生年月日、国籍、そして、移送列車の番号も記載した『フランスから強制移送されたユダヤ人の記念名簿』(1978年に初版、2012年に新版が刊行された)、また、収集した証拠となる資料群や写真や、それらに基づき作成された年譜や解説をまとめた『フランスのショア』(第1～4巻)のうち犠牲となった3000名以上もの子供たちの写真を収録した、『フランスから強制移送されたユダヤ人の子供たちの記念名簿』(第4巻、2001年刊行)がある。

また、同氏のもう１つの顔は、「ナチ・ハンター」である。弁護士として、また、活動家として1979年、「フランス被追放ユダヤ人子息子女協会」(F.F.D.J.F)を結成し会長となり、妻ベアテとともに、見過ごされていた何人もの旧ナチス高官や対独協力責任者たちを長年にわたり追い続け、ドイツとフランスで「人道に対する罪」により裁判にかけ有罪を勝ち取ってきた。なかでも南米ボリビアに逃亡していた親衛隊中尉クラウス・バルビー逮捕までの道のりは、長く険しいものであった。

ヴィシー政権下、リヨンの治安責任者であったバルビー、別名「リヨンの虐殺者」は戦後、戦犯を免れ名前を変え、アメリカ陸軍政権顧問となる一方、実業家としても成功を収めた。1972年、妻ベアテは、バルビーが潜伏している事実を突き止め新聞に公表、その後、ボリビアの軍事政権が倒れ社会主義政権に替わると、1983年2月、バルビーはミッテラン政権下のフランス当局に引き渡され、翌年からリヨンの法廷で裁判が開始され、1987年7月3日、終身禁固刑を宣告されている。夫のセルジュは原告側弁護人の一人として活躍した。

また、2017年、マクロン大統領を新しく生まれ公園に生まれ変わったヴェル・ディヴの跡地の犠牲になった子供たちの名前が刻まれた壁を前にして、クラルスフェルト氏は説明を行っている。

2019 年 3 月のパリ出張では、同夫妻へインタヴューを行うことができた。その内容も含めた夫妻の『回想録』(2015 年)を筆者が監訳者となり、現在、来年度にミネルヴァ書房より邦訳出版する準備を進めている。この著書には、シラクやパリのホロコースト記念館についての記述が多く見られるため、本書もまた、我が国ではあまり知られていないホロコーストの記憶に向き合う現代フランス、また現代史に関する重要な基本文献であると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１　　件）
・松岡智子「セルジュ・クラルスフェルト作『フランスのショア』をめぐって」(『倉敷芸術科学大学紀要』第 23 号、査読無 2018 年、pp.15-26)
〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　１　件）
・ジャック・シラク著　松岡智子　監訳　野田四郎　訳『フランスの正義、そしてホロコーストの記憶のために』明石書店、2017 年、p.139

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。